

娘が「選んだ」幼稚園

——娘の幼稚園を決めるにあたって——

倉田 知子

五月半ばの今、我が娘は、入園以来三日と空けず先生にバンドエイドを貼ってもらって帰ってきます。入園初日に登園途中転んで膝小僧をすりむき、先生に手当てをしていただいたことが、母親と離れて不安だった彼女の心の痛みをも和らげてくれたのでしょうか。それ以来、古い傷を探して

までも貼ってもらっているようです。先生も度重なる娘の要求に対して何の躊躇も無く、根気よく貼ってくださいます。そんな娘の気持ちを大切にしてお下さる幼稚園を選べたことは、本当に幸いです。

*

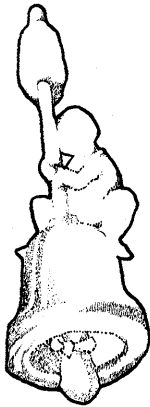
娘の幼稚園を決めるにあたっては、何か月かの間とことん悩み迷いました。とにかく良い保育者がいることを第一条件に、広い範囲でピックアップした六つの園に見学に行き、更に、気になった園はもう一度見学させていただきました。許してくださる園は、子どもと共に一時間程自由に見せていただいたりお話を伺ったりしました。

「実際に見て確かめる」ということは、大切な、貴重な体験でした。それは、「巷の評判や他人の評価は、あくまでも他人の評価である」ということとは言うまでもないことですが、各園の保育者の様子、子ども達の様子などを見ているうちに、一言で『自由保育』という名の下に行われている保育にも、その実様々な違いがある、ということが肌で感じられたように思うのです。そして、そんな

な見学、諸先輩、友人からのアドバイスを重ねているうちに、私自身の「幼稚園に求めていたもの」が徐々に変化し始め、モヤモヤしていた状態からはっきりと輪郭を持ち、「娘にとってどういう環境が必要なのか」という事がわかってきたように思います。この過程は私自身にとっても貴重な財産となりました。

*

更に見学に行く中で見逃せなかったのが各園で



の娘の反応です。ある先輩から「案外子どもが自分で選んだりするものですよ」といわれましたが、その通り、まだ二歳だった娘は言葉で表現はしませんでしたが、その行動で自然と選んでいたのはとても興味深いことでした。まさに娘も私同様、違いを肌で感じていたのです。

ある園は園庭も広く施設も整い、きれいな遊具もたくさんありましたが、娘は終始ソワソワして落ち着かず、遊ぶぎっかけもつかめず、途中で「もう帰ろう」といつてぐずってしまいました。娘にとってはたぶん環境が作られすぎていて自然に溶け込めないように感じたのでしょう。

反対にある園では帰ろうと促しても私の手を引っ張りながら、意を決したように自分の

靴を玄関から庭へ運び、黙々と砂遊びを始め、園児とは隔たりをおきつつもその側で長々と砂遊びをしていました。

この二つの園の娘の反応を見て思ったことは、子ども自身にとっては、幼稚園というものが「さあ、今日から今までの生活とはまったく違った生活になりますよ」という思いきってジャンプしなければならぬものではなく、自然な流れの中で自然な成り行きとして在る、ということは大切なのではないかということ。子どもにとって幼稚園は公園遊びの延長上にあり、でも公園にはお母さんがいて何か困った時にはお母さんにすがっていたものが、幼稚園では、そのお母さんの存在が自然に保育者に移り、ゆくゆくは困ったことが自分で解決できるようになる。そんな自然な流れで捉えた時、娘が自然にその中に溶け込み、しか

も黙々と遊べたその園の雰囲気は大事なものであるのではないかと感じました。

*

又ある園では、娘も園児の活発な遊びに促されて遊んでいましたが、どうも雰囲気は娘にとっては刺激過多すぎるのか、自ら遊んでいるのではなく、「雰囲気（刺激）に遊ばされてる」ようなそんな落着きのなさを感じました。

娘の場合集団の場になると周りの人の事がとても気になり落ち着かず、結局遊びに集中できずに終わってしまうことがよくあります。そんな娘にとっては何にか、遊びをせかされているような刺激の多さではなく、やはりじっくりとでも自ら遊びを広げられる環境の方が大切なような気が

しました（これはもしかしたら「集団の質」というようなことなのでしょう）。

そして母親である私も、一種、娘と同じような感覚を味わいました。

見学もはじめのうちには子ども達の活発な活動にただ見とれていましたが、回を重ねていくうちに私自身「元気さ」の「飽食状態」になり「えっ、ちょっと待って、これでいいの？」と思いはじめ、何か引っ掛かりができてきました。もちろん子どもというのは「元気」なものです。しかし園によっては何か「元気でいなければならぬ」そんな雰囲気があるような気がしてきました。

多くの母親の持っている子どもの好ましいイメージとして、明るく、元気な、活発なというものがあります。そして広く現代社会でも「明るい、活発」という事がプラス印象として感じられ

ます。でも、ともすると、もつと別の面、ナイーブな面があるのにそれを見てもらえず、明るい事だけで良しと評価されてしまうことに逆に傷つく場合もあるのではないのでしょうか。

我が子を見ていると、動的に遊びまわりたい時と、今日はあまり動きたくない、静かにゆったりとしていたい、という静的な時とがあります。又、友達を気持ちよく受け入れられる時と拒絶して一人でいたい時もあります。そういう、ありのままの自分でいいんだということが肌で伝わるような環境が娘にとって必要だと思ったのです。

「飽食状態」で何園かを巡った後、ある園を見学した時のことです。実習生(だった様に思いますが)、二、三人の園児達と教室から少し離れたおままごとのおうちで、延々と一時間程遊んでいました。その遊びは決して活発ではなく、お人形と一緒にお布団にもぐったり座ったりと、「静」

のものでした。その光景を見て、他の園にはなかった、何かホッとするものを感じました。「元気でいなくてはならない雰囲気」ではなく、子どもが気持ちを落ち着かせられる場所、がそこにはあったからです。

又その園に、今度は友人と連れ立って見学に行った時、その友人が「先生がどこにいるかわからない」と感想を漏らしました。私ははじめ、園の広さと保育者の人数の関係のためかと思いましたが、良く考えるとそうではないのです。そうい



えはその友人が見た教室では、先生が子どもにせがまれて何かを作っていたら、文字どおり「どこに居るのかわからない」状態でした。他の園では先生が目立って生き生きしている姿を目にしましたが、先生が目立っていることって、たとえば先生が先頭に立って「楽しくさせている」姿であったり、みんなに呼びかけるような大きな声であったり……でも子ども目線で一人一人の子どもに即していると自然と声も小さくなり目立たない存在になるのではないかと思うのです。いつか保育者である友人の勤める幼稚園を訪ねた時、彼女がその保育室と一体になって、ゆったりとした流れの中に溶け込んでいるような妙な心地良さを感じました。今度もそれと同じような気持ちになり、決して大人がひっぱっていない自然さを感じるとともに、それ故、何か子どもの内面からの力

を引き出してくださるようなそんな信頼感を覚え
ました。

*

こんな風に子どもと共に決めた幼稚園生活もスタートして一か月になろうとしています。警戒心が強く、どんな場に行っても馴染みにかかった娘が、驚くほどの速さで先生への信頼感を深めていきます。そして、実際の園生活は予想以上に娘を日々刻々と変化させていきます。山あり谷あり、その変化に、親の方が後からついていく、そんな新鮮さに戸惑いつつも浸りながら、親子ともどもこれからの成長を楽しみにしています。

(文京区在住)